霊◯新◯の献身
3

霊◯新◯の献身　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19686556

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊, 本番無し, 霊姦, ♡喘ぎ

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は本番は無しです。霊姦アリです。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

霊〇新〇の献身　３

果物ナイフを振り下ろす。
何度も、何度も。
何度も、何度も、何度も、何度も。
何度も。
「よし、これで良い」
返り血でその美しい山吹色の前髪を汚した青年は、レインコートを脱いで丸めながらはぁはぁと息を荒げる。
「埋めてしまおう」
青年は振り返って──。

映像は激しいサイレンを発して、ブツンと消えた。
「ちっ」
最上は舌打ちをする。また霊幻新隆への精神干渉に失敗した。
（常人ならこれ程強固なプロテクトは、この私にはかけられない）
はぁ、と最上はため息をつく。
ほぼ最強と言っていい大悪霊である最上が手が出せないもの。
それは悪霊の力と真逆のモノ。
（強力な神々の聖域、まだ幼い子供の純粋さ、そして──）
余りにも真摯な、愛。
霊幻新隆が持ち得る力は、おそらくそれだろう。
（霊幻君の動機が保身であれば、これ程私は惹かれなかった）
死刑に処される事が決まっていながら、霊幻新隆はあどけない少女のように、深窓の令嬢のように、毎日を楽しそうに過ごしているのだ。
愛しているのだ。それほどまでに何かを、誰かを愛しているから、霊幻新隆は笑って死刑台に向かう。
最上啓示を打ち負かすほどの、深い愛を抱いて。
（間違っている）

最上はまた花の咲き誇る丘に立っていた。
（善人が殺され、悪人が笑って暮らす。そんな世界は、間違っている）
激しい嫌悪と怒りが最上を満たす。
最上はうっとりするような青空に手を翳して、集中する。
周りの景色は嵐に変わり、ガラガラと崩れていった。
（これを見るのも何度目だか）
山吹色をした髪の青年が、屈強な男性の首を後ろに捻っている。
「よし、これでいい」
青年は念入りに死体の顔や服を触り、自分の髪を数本引き抜いて死体の服や髪に絡ませた。
「山に埋めてしまおう」
そうして『誰か』を振り返り——
サイレンだ。
映像はピタリと停止し、大きなサイレンが鳴り響く。
最上は瞠目する。どこか透き通った、心地の良い音だった。
それは、誰かを守るためのサイレンだからだ。
ばん、と突然真っ白な空間に最上は移動させられる。
霊幻が目覚めつつあるのだ。
「また俺の記憶見てたのかよ、エッチ」
「キミが真実を隠すからだ。誰が変態だ」
「……俺が語る事が真実だよ。変態とまでは言ってないだろ！？」
「キミの騙ることは嘘ばかりだ。知らないのかね、エッチとは変態の頭文字だ」
へぇ、そうなんだ、とグレースーツの青年は素直に感心する。
「まあヘンタイって言ってもいいかな」
「こら待て私のどこが変態だ」
「覚えがないとは言わせねぇぞ！？」
「さあ、死んでからとんと物覚えが悪くてな……何せ脳が無いものでな……」
「悪霊ジョーク止めろ。笑っていいのかわからん」
そう言ってから、最上と霊幻は思わず吹き出す。
「くくっ、笑ってるじゃないか」

「ぶふっ、アンタにつられたんだよ」
ああ。

この時間は、愛おしい――。

は、っとして最上はその感想を慌てて否定する。
悪霊が人を愛するとどうなるのか。元高名な霊能力者である最上は良く知っていた。
それはノロイにしかならない、と。
だから、最上にとって勘違いでしかないのだ。
この青年を好ましく思い始めている、などというのは。
「キミの証言だけでは埒が明かない。……今日はあの悪霊くんに聞きに行ってみるか」
「エクボのことか？……いじめないでやってくれよ？」
「ほう？」
真っ黒な眼を細めて最上はイタズラっぽく笑う。
「私に『お願い』かね？」
うっ、と、しまったと言いたげに霊幻が顔を歪めた。
「……まあ、そういうことになるかな」
「ほう、ならいつも通り対価を頂こうか」
ばち、と目覚めて。
かあああと霊幻は顔を赤らめた。
「……やんの？」
「ああ」
独房の布団に仰向けに横たわる囚人着の霊幻の両手に、霊体の壮年男性がするりと絡めるように縫い止めるように抑え込む。
「……っ」
性的なにおいに、霊幻は顔を赤らめてそむける。
その首筋に、最上は柔らかく、深く口付けた。
「……ぁ」
その感覚に霊幻が小さく声を漏らした。
最上は霊幻の反応を楽しみながら舌を首筋に這わせた。
「ん、……っ」

最上に抑え込まれた手に力が入る。
「部位によって生気の味が変わる。君の生気をいただくようになって初めて知ったよ」
「……っ、でも、こんな、舐めたりする必要……っ
は、ぁ……！！」
最上の唇が胸に落ちて、霊幻は甲高い声を上げた。
「ゃぁ……、ぁ、あ……ん、んぅ……やめろよぉ、そこばっ
か……」
意地悪く乳首を責めたてられて、霊幻は足をもじもじとさせる。
「ひもちいいのらろう？」
「ひ、あ！しゃぶったまましゃべるな、ばかぁ……っ」
「ん？もうカウパーを漏らしているのか。仕方ないな、粗相をする前にまた射精管を塞いでやろう」
強制的に精液の出口を塞がれて、ビクンと霊幻は腰を跳ねさせる。
「あ、が……っ！」
「さて、生気をいただくか」
ずぶ、と顔を胸に埋めて、最上はとくとくと健気に鼓動する霊幻の心臓を、ベロリと舐め上げた。
「あ゛―――っ！！！！」
霊幻は眼を見開いてのけ反った。
最上は霊幻の心臓の中に光り輝くオパールのような魂に、うやうやしく口付けた。
「ひ、ぃ……っ」
霊幻はぎゅっと最上の手を握り返す。
ペロ、と少しだけ最上は魂を舐める。
「あぁああああっ！！」
ぎくり、と霊幻の全身がこわばった。
（甘露―――）
最上はうっとりと眼を細める。一舐めで頭まで痺れるような美味であった。
もっと、と思う心を抑えて頭を胸から抜く。味わいすぎると喰らい尽くすまで我慢できなくなるおそれがあった。
「はっ……、はぁっ……」

涙目で震える霊幻に、最上の喉が鳴る。
「今日もサービスで抜いておいてやる」
そういうことにしておかないと、最上は一線を越えてしまいそうだった。
最上は手を離し、霊体化して霊幻の尻の中を探る。
「前立腺とやらの方が気持ち良さそうだったな？待ってろ、マッサージしてやる」
「！！いい、ちんこでいい！！そこはやめ――はぁああぁあっ♡♡♡」
ぶに、と前立腺を２本指で挟まれて霊幻はあられもない声を上げてしまった。
「あぁんっ♡やだぁっ♡ひぃ……っ♡やら、ぁああ……っ♡」
「よさそうだが」
最上は無情に前立腺を押し潰し、こりこりと指でつまみ、ぐにぐにと変形させる。
「ひぃん……っ♡イく、イくぅ……っ♡♡♡」
「イくといい」
最上はついでとばかりに、霊幻の陰茎も擦り上げた。
「〜〜〜〜っ♡♡♡♡」
霊幻が手繰り寄せたシーツが波打つ。
絶頂する人間の姿というのは、なるほどなかなか美しいものだな、と最上は興味深く、メスイキで悶え苦しむ霊幻を眺めていた。
「夜が明けるな」
ふと最上は空しか見えない死刑囚房の窓を見上げる。
「私は不可視化するが、用があれば話しかけたまえ」
「……っ、……っ！」
まだ絶頂の余韻に涙目の霊幻は、せいっぱいの恨みを込めて最上を睨んだ。
その扇情的な姿に、ただ少しだけ、最上は口角を上げた。

※

（おや）

相談所には強力な悪霊避けの結界が張られていた。
正確に言うと、最上啓示避けの。
（嫌われたものだ）
最上は難なくその結界を解除する。
「やあ。邪魔するよ」
「本当に商売の邪魔だから帰ってくれねぇかなぁ！？」
そこには憑依体のエクボと、臨戦態勢の芹沢がいた。
「ちょっと聞きたいことがあってね。霊幻新隆の殺人だが、あれには協力者が居たんじゃないかと思ってね？」
さーっと芹沢の顔が青くなる。
それを見てエクボは舌打ちした。
「……場所変えようぜ」
エクボは立ち上がって事務所を出る。
近所のファミレスで、エクボはアイスコーヒーを１つ注文する。
店員はアイスコーヒーを２つ持って来た。
「あ、あれ？すみません、もう一人、ここに誰か座ってらしたような気がして……」
最上は笑ってヒラヒラと手を店員に振っていた。
それをエクボは冷めた目で見ている。
「大悪霊さんよ、なんであんたが探偵の真似事なんかしてるんだ？」
ずずず、とコーヒーを吸いながらエクボが胡散臭そうに言う。
「霊幻新隆が人殺しだとは思えないからだ」
「……」
「人を殺した悪党はのさばり、誰かを庇っている霊幻新隆は死に向かっている。──私はこういうのが一番不快でね」
エクボは眼を伏せる。
「俺様だって、あの小心者が人を殺したなんて信じられねぇよ。だけど警察の捜査の結果、そういうことになっちまった」
「……君は霊幻新隆が人を殺したところは見ていないんだな？」
「ああ。……だけど、死体を埋めるのなら見てたぜ。……忘れようがねえよ。号泣するシゲオが超能力で土を掘り返して、２人して黙々と死体を穴に運んで、土を掛けてるんだ」

「何！？」
最上は身を乗り出す。
「影山君と、２人で！？」
「ああ。『大丈夫だからな』とか、なんとか、霊幻の野郎は言ってたな……死体埋めを手伝わせておいて、なんて言い草だろうな」
「……」
最上は顎に手を当てて考える。
（手伝わせた（・・・・・）？いや、もしかすると、むしろ──）
「……影山君に話を聞く必要があるな」
最上は立ち上がってふわりと宙に浮かぶ。
エクボはアイスコーヒーを吸いながら、それを目だけで追いかけていた。

「……真相なんてみんな知ってるんだよなぁ」

その言葉は、誰にも届かなかった。